

(No. 1)

事例名	常設型地域の茶の間「うちの実家」
地域	新潟県新潟市
実施主体	常設型地域の茶の間うちの実家（代表者 河田 珪子）
活動要約	赤ちゃんからお年寄りまで、誰もが参加でき自由に過ごせる場
主な分野	「憩い」・「介護・ケア」
主な関係者	任意団体 うちの実家 会員 約 300 人
キーワード	常設型／地域の茶の間／居場所／コミュニティカフェ／夜の茶の間

■活動のきっかけ・経緯

- ・代表者の河田さんは、大阪で特養に勤務ののちに義父母介護のために新潟に帰郷し、会員制で有償による市民相互の助け合いの住民参加型の在宅福祉サービス「まごころヘルプ」を1990年に設立した。しかし、活動するなかで家族といっても孤独な高齢者が多いことに気づき、子どもからお年寄りまで1時間でも1日でもいられ更に泊まることができる場所が必要と感じ、「地域の茶の間」を開催した。
- ・活動は、1997年7月から地域の山二ツ会館で毎月1回第3日曜日に「地域の茶の間」を開催したことから始まり、やがて新潟県の長期総合計画で県内各地に広がった。その後、地域外の参加者が増えたことや、参加者のいつでも利用したいなど新たなニーズを受けて、発展的にこれを解消して、2001年3月に常設型の「うちの実家」を任意団体として設立した。
2003年3月には空き家を借りて整備し、オープンな憩いの場所として利用されており、公的援助無しで採算の合う運営がされている。
- ・現在、河田さんは、「うちの実家」を代表として運営すると共に、同様の居場所作りやコミュニティカフェなどの普及のために全国でセミナーや講演の講師として積極的に推進活動を行っている。
またこの「うちの実家」は全国に30,000箇所あると言われているコミュニティカフェの先駆けとして、その手法を学ぼうと、全国の福祉や地域活性化を担う関係者の視察が訪れる注目の場所となっている。



<気軽にいけるうちの実家>



<河田 珪子 代表>

■活動内容

- ・誰かに会いたい、誰かと話したい、誰かと一緒にお茶を飲みたい、行くところが欲しいと言う人々の願いに応えた常設型の地域の茶の間に、子どもからお年寄り、障がいの有無に関わらず、誰でも、い

つ来て、いつ帰ってもいい居場所で、男性の参加者や外国から来て日本に暮らす親子もいる。

- ・この場所ではみんなでやる特別なプログラムはなく、何をしてもいい。得意なことや、やりたいことをする、何もしなくてもいい。参加者が自分の実家ですごくように、思い思いの時間を過ごす。いろいろな人がお互い様の関係の中で一緒に時間を過ごすことで、相手の不自由さを知り、いつの間にか自然に助け合うようになっている。
- ・利用できる日は、火・金曜日と第1・第2土曜日の10～15時。実家のように泊まることも出来る。
- ・利用料金は、参加費が1日300円、食事が300円、宿泊が2,000円（光熱費、リネン洗濯代）である、会員の年会費は2,000円である。



＜会食し自由に過ごす参加者＞



＜織物機で織物を行う利用者＞

■ポイント・工夫している点

■運営経費の収支状況

- ・参加者からは会員会費とその都度参加費や食事代を頂き、バザー、寄付、で運営し当番1名のみ小額有償して、参加者が出来ることを当たり前で助け合っており、ぎりぎりだが赤字は出していない。

■地元自治会の協力を得る

- ・設立時は、地元自治会の協力を得て自治会に入り回覧板で周知した、バザー・除雪・庭木の手入れ・来客時に近所の家などの空き駐車場を借りるなど地域の協力を得ており、正式に自治会に入り会費を払って日常回覧板やゴミ当番にも対応し実施している。

■地元の小学校の子供たちも利用

- ・地元の小学校の子供たちが授業の一貫として訪れたり、夏休みなどに誘い合って遊びに来ている。研修、視察なども多く、その説明はうちの実家の参加者の活躍の場ともなっている。
- ・みんなの決まりごとがあり、利用者が上下関係なく和やかに静かに過ごせるようにしている。



＜子どもと一緒に和やかに過ごす＞



＜高齢者が子どもに習字を指導＞

■「夜の茶の間」として異業種交流の場に利用

- ・金曜日の夜は、「夜の茶の間」として異業種交流の場にしており、会社員、公務員、医者、社会福祉協議会、NPO、事業者、自治会、民生委員等々誰でも参加できる。この日のみ名刺交換があり、情報交換の場になっている。

■多様なネットワークを活かしたイベント利用

- ・個々のネットワークとしての活用だけでなく、この多様なネットワークを活かして講演会なども企画実施している。
- ・石山地区公民館、東区社会福祉協議会、地元コミュニティ協議会、およびうちの実家が毎年共催している講座では、地域住民を対象に、不便な家でも暮らせるように、実践的な実技研修をバリアだらけのうちの实家の中で行っている。

■男性のグループも継続して活動

- ・男性の料理教室に通っていたグループ（八浪会）から年3回食事作りを担当してもらっている。退職者の男性たちが立ち上げた農園「にいがた・夢農園」の連絡場所として活用してもらおうと同時に昼食食材の野菜を届けてもらっている。

■災害時の避難所として利用

- ・7.13水害の時（2004年7月）は、避難所にいた5人の要介護者の9日間の生活の場となった。また、中越地震（2007年7月）の際は、川口町の仮設住宅に暮らしている人の実家として活用された。

■部屋の貸出など広く利用

- ・要望に応じて、町内会役員会や、生き辛さを感じている人達のグループに部屋の貸し出しや、知的障がい者作業所や精神障がい者作業所の焙煎コーヒー、トイレトペーパー、豆腐などを日常的に使用している。

■課題と今後の展開

- ・課題は特にないが、今は新潟市でも施策として取り組み、歩いていける範囲に「地域の茶の間」が出来てきているところから、うちの実家の継続に固執する必要はなくなってきている。
- ・居場所づくりを目的にするだけでなく、お互いの不自由を知り、できることを進んでやり、自然に助け合いがなされる地域づくりが大切だと考えている。
そして自ら「助けて!」といえる地域づくりにつながることを願っている。

連絡先	「うちの実家」(代表：河田珪子) 住所：新潟県新潟市東区栗山4丁目5-1 電話番号：025-277-9398 メール：u-jikka@khaki.plala.or.jp
-----	---

(No. 2)

事例名	みんなのお茶の間「くるくる」
地域	北海道札幌市
実施主体	土橋 紘子（個人）
活動要約	自宅を開放して週1回、近所の方が集まり趣味活動などを行う
主な分野	「コミュニティカフェ」・「趣味」・「憩い」
主な関係者	運営者：土橋紘子他2名 参加者：地元のシニア女性・子育てママ・障がい者など（10名前後）
キーワード	みんなのお茶の間／自宅開放／ゆるやかなつながり／「夜のお茶の間」

■活動のきっかけ・経緯

- ・ 主宰者の土橋紘子さんは、小学校教員として勤める傍ら、週末は地域とのつながりを求めて地域の青少年育成委員として活動していた。
- ・ 退職後も、人と人が緩やかにつながるまちにしたいという想いを、町会活動などに関わる中で模索していた。地域の商店街で開催された「まちづくりを考える会」で、新潟のまちづくりコーディネータ清水義晴氏から「地域の茶の間」の話を聞く。
- ・ 当時、札幌ではサロン活動があまり行われていなかったが、新潟市の河田佳子さんの取組み「うちの実家」（事例No.1）に惹かれ、現地の見学と勉強を重ね、2003年12月に仲間と「くるくる」を立ち上げる。
- ・ ボランティア研修センター、社会福祉協議会などで「くるくる」の紹介を積極的に行う他に、学会・シンポジウムや「うちの実家」への定期的な訪問を通じた勉強、町会活性化プロジェクト、商店街のイベントなどに主体的に関わり、まちづくりの担い手として活動している（知り合う事を目的に、茶の間メンバーと商店街に食事に出かけたり、よその地域の茶の間の訪問も行っている）。

■活動内容

- ・ 自宅のガレージを和風の空間に改造して「くるくる」を開設。開設日は、毎週火曜日の10時～15時で、お茶とお菓子代として夏季100円、冬季は150円の参加費をもらっている。



<ひだまりでのおしゃべりと手芸活動>



<これまでの手作り作品>

- ・好きなときに、好きな事をして過ごすことをモットーに敢えて会員制にはしていないため、10名程度のリピーター(主に女性)を中心に、口コミで聞きつけた人が立ち寄ることもある。
- ・90代の利用者が来なくなって連絡をしたりと、「茶の間でゆるやかにつながる」ことが見守りにもつながっている。
- ・基本は、好きな事をして時間を過ごすことだが、手芸の得意な利用者同士がアイデアを出し合っ
て手作り品を作成し、保育園や敬老の日のイベントでのプレゼントや、商店街のバザーなどでの出
店をしている(喜んでもらえる事が嬉しいので、常に創意工夫している)。
- ・茶の間の開催以外の時間帯では、パッチワークや南京玉すだれなどの教室の定期開催や、町会の打
合せ、夏休みの自由研究のお手伝いイベントなどで利用されている(高齢者だけではなく、子育て
世代などにも門戸を開いている)。
- ・友人を中心に「くるくる」を見学した人々により、ここをモデルにした多様な拠点での茶の間「み
ずほ(地域の会館)」、「なでしこの会(自宅にある集会室)」、「きまま かふえ(生活クラブ生協の事
務室)」が開設している。

■札幌市でのサロン活動の概況■

子育て、障がい者、高齢者などを対象に、多様な拠点でのサロンが開設されており、平成22年度の札幌市地域サロン開催実態調査¹⁾によるとその数は781箇所。

¹⁾ (http://www.sapporo-shakyo.or.jp/sites/default/files/pdf/2011/03/29/hptoukei_0.pdf)

■ポイント・工夫している点

- ・新潟の「うちの実家」を参考にして開設された地域の茶の間だが、さらにここがモデルとなって、周
辺に複数の拠点が広がっている(口コミと見学による自然増殖)。
- ・自宅を地域に開放し、いつでもだれでも自由に参加できる「ゆるいつながり」を大切にしている。
- ・2005年からは、「くるくる」に出入りしていた精神障がい者支援NPOの青年の発案で、平日の昼間は
集まりにくい現役世代をターゲットに、「夜のお茶の間」を開催している(毎月第三金曜日の18時半
~21時、参加費500円、白石まちづくりハウスと交互での開催している)。

■課題と今後の展開

土橋さんは、今後の課題と展望について以下のように語る。

- ・新潟市の地域の茶の間の数と較べると、札幌市はまだまだ少ない。
- ・「くるくる」という場も大事だが、町会を主体とした「ふれあい広場本郷」との連携、皆で食事ができ
る場所など、多様な場があった方がよい。
- ・東日本大震災による被災者の受け入れを表明しているが、まだ実現はしていない。

連絡先	みんなのお茶の間「くるくる」(代表：土橋紘子) 住所：札幌市白石区本郷通8丁目南5-17 電話番号：011-864-9148 メール：tsu-hiroko@jcom.home.ne.jp
-----	--

(No. 3)

事例名	時間通貨「ありがとう」
地域	徳島県藍住町
実施主体	NPO 法人 さわやか徳島（理事長 麻野 信子）
活動要約	感謝の気持ちのふれあい活動を通して、24 時間 365 日提供する有償常設型の憩いの場で、ボランティア活動とフォーマルケアを組合せた地域の拠点。
主な分野	「憩い」・「介護・ケア」・「子そだて」・「世代間交流」・「学習」
主な関係者	さわやか徳島 ボランティア会員 約 270 名（40 歳～70 歳）
キーワード	常設型居場所／時間通貨／インフォーマルケア／フォーマルケア

■活動のきっかけ・経緯

- ・発足の経緯は、運営を代表する麻野信子理事長が徳島県藍住町の保健師として働く中で、在宅ボランティアの必要性を感じ団体「メンタルフレンド あじさいの会」を平成 6 年に結成。翌平成 7 年 7 月には自宅を開放して、勉強会とお茶会を始め、平成 9 年に「さわやか徳島」と改称した。
- ・平成 18 年 2 月には地域の居場所として「幸せの家 ありがとう」を開所し、時間通貨「ありがとう」の活動は平成 10 年から 7 名で立ち上げた。弁護士・元検察官の堀田力氏が設立した公益財団法人さわやか福祉財団が「時間預託制度」を推進しているのに学び、平成 11 年には NPO 法人を取得して徐々に活動を広げ、平成 12 年度は介護保険事業も開始し現在の活動拠点となっている。
- ・時間通貨とは、人々の暮らしにおける生活困難を気軽に助け合いながら「新しいふれあい社会」をつくるツールである。「ありがとう」という感謝の気持ちで行なったことを手帳に記録する形で表したものが「時間通貨・ありがとう」であるが、実施当初はなかなか定着しなかった。3 年ほどしてから少しずつ広まり、現在はボランティア会員数も 40～70 歳を中心に 270 名を超え定着している。
- ・なお麻野信子理事長は、精神保健福祉士や保健師・助産師、介護支援専門員の資格を持つと共に、徳島大学医学部の臨床教授も務めている。

■活動内容

- ・ボランティア会員による時間通貨の活動は、費やした時間を対価として求めるものではなく、相互の助け合いをした「ありがとう」という感謝の気持ちを利用活動の都度手帳に記録している。
- ・時間通貨の活動拠点となっている「幸せの家 ありがとう」は、医療や介護のケア体制が整い、宿泊から終末期の看取りや子育て支援、学生実習の場として地域に開かれ利用されている。
- ・居場所には、365 日、24 時間の訪問看護ステーションがあり、また美容師や歯科医、緩和ケア医師や内科医も連携していて、24 時間体制での医師による往診もできる。
- ・地域の高齢者から小さい子ども達の憩いの場となっていて、シャボン玉大会や子ども達の集う小図書館には三谷・多田文庫もある。



<麻野信子 理事長>

- ・この「幸せの家 ありがとう」は、無償ボランティア会員による時間通貨の助け合い活動等によるインフォーマルケアと、医療や介護等のフォーマルケアとをうまく組み合わせたところが特徴的である。
- ・時間通貨ボランティアの具体的な仕組みについては、登録している会員約 270 名の連絡ネットワークを構築しており、色々なサポート要望を拠点で受け整理して活動できる人を適時依頼し配置している。
- ・拠点の利用は、参加費無しで、食事代として大人 500 円、学生 300 円、子ども 200 円または無料、個人の車を利用した送迎活動等については、燃料代として 5 kmあたり 100 円のチケットを発行している。
- ・利用状況は、高齢者が 1 日に約 20 人訪れる他に、小学生や中学・高校生も年間約 500 人来所している、また幼稚園児も毎月 30 名ほど訪れて過ごしたことや活動を時間通貨として手帳に記録している。



＜活動を記録する時間通貨の手帳＞



＜世代や国を超えた憩いの場所＞

■ポイント・工夫している点

- ・「幸せの家 ありがとう」に居る間に「ありがとう」を 5 回以上誰かに使い、ふんわりとしなやかに、そして熱心に伝えていく。
- ・時間通貨の仕組みを最初に取り入れた当初は、行なったことや時間を「おつかい」「食事の片付け」などカードを使っていたが時間を交換する対価としてだけに扱ってしまいやすく、現在は過ごした時間や活動した内容から得られる感謝の気持ちを手帳に記録する方法で全員が実施している。
- ・常施設だけでなく、介護福祉士、医師等の他に、歯科医、マッサージ師、美容師、管理栄養士等も訪れて、小さな統合ケアの家として機能している。

■課題と今後の展開

- ・時間通貨は平等な立場が基本で、看護のような強いものが弱いものを助けるような関係で使用されると一方通行になり問題が起こる、ボランティアの担い手も受け手から感謝の気持ちをもらっているという事に気づくように勉強会や活動評価を継続して対等な関係での活動を理解するように努めている。
- ・「ありがとう」という感謝の気持ちによる時間通貨の考え方を全国に推進をして行きたい。
- ・時間通貨「ありがとう」の考え方を十分に理解し互いの助け合いから生まれる感謝の気持ちを保ち忘れずにおれば、将来は行なった活動を記録する手帳は必要がなくなると、麻野理事長は考えている。

連絡先	NPO 法人 さわやか徳島（理事長 麻野 信子） 住所：徳島県藍住町東中富字地神 60-3 電話番号：088-692-3457 メール：st-nobu@mxi.netwave.or.jp
-----	--

(No. 4)

事例名	すずの会
地域	神奈川県川崎市
実施主体	ボランティアグループ「すずの会」
活動要約	地域の有志や「世話焼きさん」が、ちょっと気になる人(独居の方や高齢者夫婦)を仲間に、ゆるやかで、穏やかな関係を作り、悩みをさりげなく聞き出す場として自宅を開放。市の「いこいの家」では食事をともにしたり趣味活動を行っている。
主な分野	「見守り」、「食事会」、「憩い」
主な関係者	ボランティア：シニア 60 名（平均年齢 65 歳） 参加者：地域の後期高齢者／地域内の施設入居者
キーワード	地域密着見守り・支え合い／ご近所サークル／気づき／世話焼きさん／ミニデイ／ダイヤモンドサークル

■ 活動のきっかけ・経緯

- ・すずの会代表の鈴木恵子さんが、介護経験を地域で生かそうと思ったのが大きなきっかけ。
- ・30 代の後半から 10 年ほど、親の介護を在宅で行い、看取った経験から、この活動が始まる。当時は、介護保険導入以前であった事も有り、精神的に支えてくれる人は、家族ではなく、近所の人々だった。それが一番ありがたかった。介護する人間のサポートが必要であると、この時に強く感じた。この介護をしていた時の自身の思いと、同じ思いをしている人々が非常に多いという事に気づき、平成 7 年 9 月に「すずの会」を設立。「ちょっと困った時、気軽に鈴を鳴らしてくださいね」という想いを込めて命名した。



■すずの会の概要

◆ 設立メンバー

- ・当初、小学校の PTA の仲間 5 名から始まり、平成 23 年 4 月現在、60 名。
- ・会員は、全員ボランティア。過半数が 60 歳以上。

◆開催場所：老人いこいの家（愛称いこいの家）

- ・地域の健康なお年寄りのふれあいや生きがいの場としての機能に加え、虚弱なお年寄りを地域で支え合い、助け合っていくための福祉活動の拠点機能を併せもつ市の施設
- ・60 歳以上の川崎市在住の方が利用出来る、市の施設のため、利用料は無料。

■活動内容

「私たちが出来る事はなんでしょう」をモットーに活動している。活動があるから人を集めるのではなく、「この人」のために活動を生み出す。制度に馴染まない隙間を埋める。世話役をボランティアとして実施している。

主な活動は、以下の通りである。

- ① 集いの場
 - ・ミニデイ「リングリングクラブ」
 - ・ご近所サークル「ダイヤモンドクラブ」
- ② 地域ネットワーク「野川セブン」
- ③ 介護者サポート(スポットヘルプ・介護相談)
- ④ 情報提供(介護情報誌『タッチ』発行)
- ⑤ 特養内地域開放型「喫茶マロニエ」

◆集いの場

1) ミニデイ

毎月/第2水曜・第4火曜 10時～15時に開催する見守りシステムであり、これに出席する事で、元気である事や、ちょっとした変化を知る事が出来る。

朝10時-15時「野川いこいの家」に集う。午前中は折り紙や塗り絵をし、みんなで昼ご飯(ボランティアの手作り:500円)を頂き、午後は、お歌の会を実施。

<参加者の声>

ここに来て、みんなと顔を合わせてコミュニケーションをとるのが月2回の楽しみ。



<左側のエプロンの女性はボランティア、右側の男性は参加者>

2) ダイヤモンドクラブ

ご近所サークルであり、ご近所単位の集いの場である。この活動は、地域の有志や「世話焼き

さん」が、ちょっと気になる人(独居の方や高齢者夫婦)を仲間にゆるやかで、穏やかな関係を作り、悩みをさりげなく聞き出す場として自宅を開放。助け合いのできるご近所作りを心がけている。開催は年に3回以上。

【ダイヤモンドクラブの種類】

- ① 世話焼きさんがご近所に声かけ自宅開放
- ② 特定の要援護者を支えるダイヤモンドクラブ
- ③ 老人クラブパートⅡ
- ④ 民生委員さんが中心のダイヤモンドクラブ
- ⑤ 介護者中心のダイヤモンドクラブ
- ⑥ 男性中心「黒ダイヤ」
- ⑦ ボラボラ¹中心「プラチナーズ」

◆活動運営に関する収支、会費等について

本年度は、参加者費(お昼ご飯代：500円)と、代表が執筆した本の印税でまかなっている²。その他すべて、ボランティアスタッフで、昨年までの2年間は、補助金100万円が出ていた。

*実質、年間運営費は400万円～500万円かかる

■ポイント・工夫している点

①「ご近所パワー活用術」

自分を含めた、地域住民の老後考えたグループづくりを目指す。

生活者の視点を忘れずに、当事者の立場で考え、身近なつづやきを実践に生かす。

無理をせずに、身の丈に合った実践の積み重ねる事。

- ##### ② 川崎市から依頼され、代表を中心として、近隣のシニア情報を地図に色分けをして整理している。自らの足で情報を得ている。



■ 課題と今後の展開

¹ ボラボラとは、ボランティアをケアするボランティアのクラブ

² 代表が読売賞を受賞、100万円の賞金は活動費として使われている。

鈴木代表は、地域の中でお金を生み出して行きたい、社会事業化を目指したい、自分たちの拠点の場を作りたいと考えている。

仕組みを作るのではなく、活動の積み重ねであり、これを続けていく事であると語る。

また後継者に関しては、育てる事はできない、発掘しかない。向いている人を見抜き、上手く協力をあおぎ、少しずつ責任や負荷を与えていくという方向である。

連絡先	ボランティアグループ「すずの会」 （代表：鈴木恵子） 住所：川崎市宮前区野川 3051-28 電話番号：044-755-7367 携帯電話：090-9294-1342 http://suzunokai.com/suzunokaitoha.html
-----	---

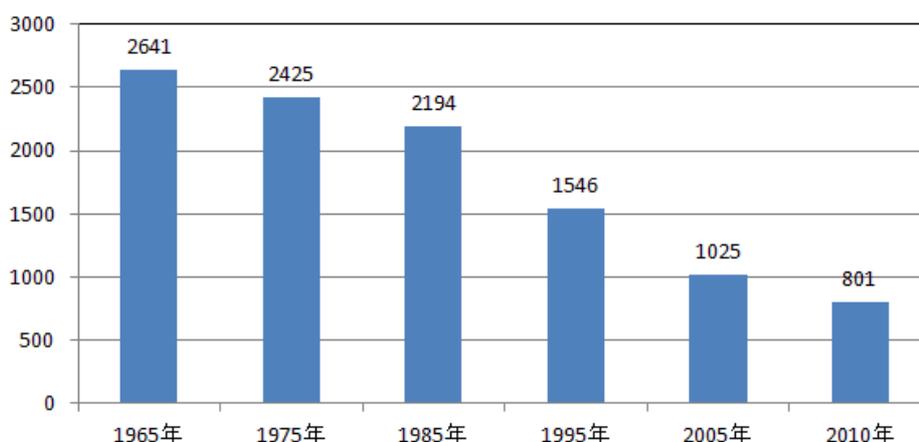
(No. 5)

事例名	「コミュニティ銭湯」
地域	東京都大田区・渋谷区
実施主体	大田区浴場組合連合会（大田区）、渋谷区役所（渋谷区）
活動要約	高齢者が銭湯で健康指導・介護予防運動や落語・音楽などを楽しむ
主な分野	「介護・ケア」・「憩い」・「趣味」
主な関係者	講師・演者：大田区は高齢者ボランティア、渋谷区はプロを含む幅広い層 利用者：大田区は年齢制限なし、渋谷区は高齢者に限定
キーワード	公衆浴場（銭湯）／「ぬくもりの湯」／「遊湯～ひろば」／介護予防

■活動の概要

●東京の公衆浴場（銭湯）

- ・東京都内の公衆浴場（銭湯）は、この30年で3分の1以下に減少しているが、地域の高齢者にとって、気分転換と憩いの場となっている。
- ・以下では、公衆浴場を高齢者の交流、介護予防の場として積極的に活用している大田区と渋谷区の取り組みを紹介する。



（出典：東京都生活文化局）

<東京都内の公衆浴場数の推移>

●大田区「ぬくもりの湯」

- ・平成23年4月より、大田区浴場連合会として「ぬくもりの湯」事業を開始。
- ・区内の52銭湯（23区で一番多い）のうち、10銭湯が参加している。
- ・大田区では2階が食事やイベントコーナーになっている銭湯が多い（江戸の「二階風呂」の名残り）。
- ・利用者は、当初は65歳以上という年齢制限をしていたが現在は無い。
- ・はじめた動機は高齢者に長く健康でいてもらいたいこと、介護費用の削減につながる。
- ・出し物は、ノコギリ演奏、落語、紙芝居、コーラス、南京玉すだれ等に人気がある。シルバー人材センターから人を派遣してもらう。出演料はなく、入浴券を進呈している。
- ・パイロット事業であり、今後継続するかどうかは未定。

- ・大田区主催の「健康入浴大学」では、年1回、保健士が健康指導や認知症のテストを行っている。
- ・30年前は区内に124軒の銭湯があったが毎年減少している。これが最大の課題である。
- ・取材当日、銭湯「桜館」の2階では、落語会が上演されていた。奇怪亭小千万（きかいていこせんば）という高座名をもつ元旋盤工（後期高齢者）の方がボランティア出演。若いころから落語が好きであったが、人前では通る声が出ない（仕事柄、声を出す機会もなかった）。月1回、老人ホームでもやるが、あまり複雑な話は受けない。銭湯の高座とは様子がだいぶ違います、と語る。



<銭湯2階で落語会>



<血圧測定>

(2) 渋谷区「遊湯～ひろば」

- ・区の事業として銭湯へ補助金を出し、14浴場で実施中。
- ・人気があるのは、落語、津軽三味線、民謡、ちぎり絵、マッサージなどである。
- ・講師は30名ほど登録。プロの方も多く、謝礼は1回1～5万円。
- ・年間125回開催。1回あたり平均16人が参加。
- ・介護予防・ひきこもり対策事業として、今後も継続してゆく予定である。
- ・渋谷区の高齢化率は18%（平成22年度末）であり、区全体としては若年人口比率が高い。
- ・取材当日、笹塚の「栄湯」の脱衣場でアンデス音楽演奏を見学。演奏者は30代の男性。



<銭湯脱衣場でのアンデス音楽演奏会>

■課題

- ・公衆浴場の数が年々減少しており、これが最大の課題である。

連絡先	大田区浴場連合会： http://www.ota1010.com/j_main.html 渋谷区「遊湯～ひろば」： http://www.city.shibuya.tokyo.jp/fukushi/kaigo/yuyu.html
-----	---